

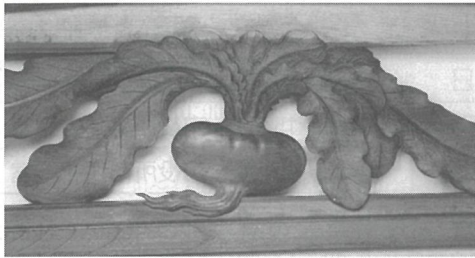
「石見根付 (下)」

偉大なる先達・清水巖が残したもの

根付は当時の日用品であったため、身に付けるのに適した大きさ・形であり、施された彫刻は欠けたり取れたりせず、必ず紐を通す穴が2つあることという条件がありました。

これらの条件を満たしながら、当時の風流人たち（現代の私たちにも）に認められるような優れた作品に仕上げなければなりません。数ある根付においても異彩を放つ、石見根付独特の写実性、精緻な技巧はいかにして完成したのでしょうか。

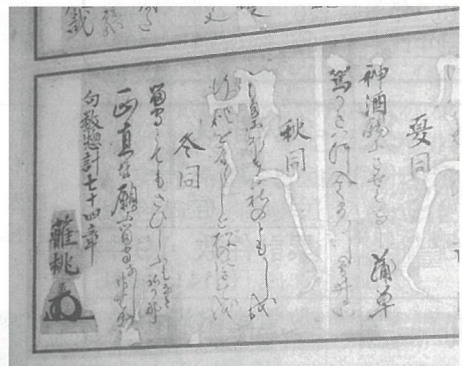
石見根付の開祖清水巖は、享保18年（西暦1733年）、出雲玉造に生まれました。13歳で仏門に入りましたが、彫刻の才を認められ江戸に出て修行し、出雲・石見を転々としていたところ、巖の才を認めた当時の有力者横田五左衛門に招かれ郷田に入り、現在の嘉久志町に居を構えました。その後和木の小川家の保護を受けています。



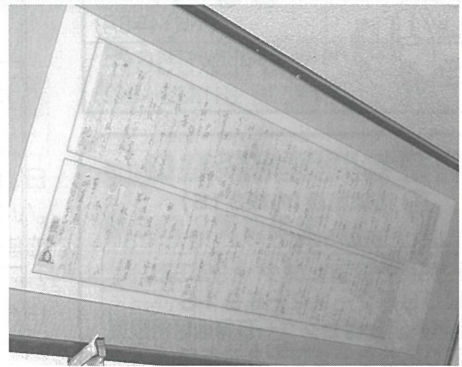
巖の高弟佐々木富明の木彫「蕪（かぶ）」
※材は黒柿 タテ23.5×ヨコ73.0cm
（市内在住・三浦義臣氏所蔵）

巖は根付以外の彫刻、置物や家の欄間など、の秀作も多く、二代文章女（巖の娘や三代巖水（巖の孫）、巖に匹敵するほどの根付の秀作を残した弟子の佐々木富明なども巖と同じく素晴らしい彫刻作品を残したと伝えられています。また、巖は寺子屋を開いて学問を教え、俳句や書も一流の文化人でした。ちなみに、巖は製陶法にも通じており、根付の技術と共に教えを受けた門人永見房造は、長浜人形の中興の祖として活躍しました。

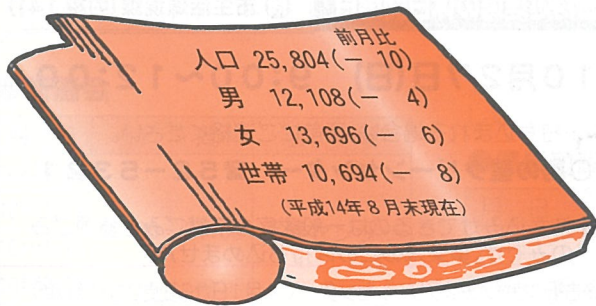
初代巖らの根付には、自ら詠んだ句や自らの存在証明のような銘（名前に加えて、作品をつくった時、場所、そのときの気持ち等を綴った漢文）が、手で彫ったものとは思えないほどの達筆で施されているものが数多くあります。二代・文章女も俳句をたしなみ、その書は巖以上に優れていたともいわれています。俳句は、作者の溢れんばかりの感嘆の情をたつた17文字に凝縮させることにより、より大きな感動を生み出すことができます。巖の根付には、秀逸な彫刻の数々や一級の腕前を持つ書や俳句などで養われたセンスと技術が、俳句の「17文字」のように凝縮され、見る者を魅了します。



郷津祇園社（現山辺神社）への「奉納発句」（郷田公民館所蔵）
※書は文章女のものという説もある。「籬桃」は巖の俳号。



根付、特に石見根付も俳句と同種のものなのかもしれない。清水巖が、彫刻の様々な技法に加え俳句や書など幅広い知識を駆使してつくりあげた石見根付の技法は、文章女を初めとする巖の弟子達にほぼ完全に伝授されており、彼らもまた優れた根付を残しています。彼らが巖に伍するほどの才能や知識を有していたとは考え難く、何らかの秘伝が存在したのではないかと思われま



●資源保護のため、この広報紙は再生紙を使用しています。

編集後記

▽今年百歳を迎えるみなさんにお会いした際、人生の大先輩の存在に感動しました。▽過去の広報を見るたび、先輩担当者の素晴らしさ、自分の力不足を痛感しています。▽清水巖のみならず、何事も先達は偉大なり、ですね。▽「石見根付」の掲載には、彫刻家田中俊晴氏（嘉久志町）に多大なるご協力をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。（未来）